

和歌浦「あしべ屋別荘」と夏目漱石

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-11-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 直子, 西本, 真一 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/308

和歌浦「あしべ屋別荘」と夏目漱石

“Ashibe-ya Annex” at Wakaura and Natsume Soseki

西 本 直 子*
Naoko Nishimoto

西 本 真 一*
Shinichi Nishimoto

要旨

夏目漱石が和歌山での講演の折に宿泊を予定していたのが景勝地の和歌浦に立つ「あしべ屋別荘」である。「あしべ屋」は江戸時代初期に建てられた由緒ある茶屋であったが、明治時代には規模を拡大させて料理旅館を営み、本店の他に別館や別荘を構えた。しかし当時の写真や地図で見られる「あしべ屋別荘」の場所については一致しない点があり、諸史料の整理を改めて試みたのが本稿である。その後、「あしべ屋別荘」は昭和期に地元で建設業を営む西本健次郎によって購入された。明治時代後期に興隆をきわめた旅館本店はすでに失われて久しいが、和歌浦の内海に浮かぶ小島の妹背山には今でも「あしべ屋別荘」が残っている。皇族や名士たちを迎え入れ、最上客のための宿泊施設として重要な棟であったこの「別荘」は和歌浦の観光史を考える上で極めて重要である。本格的な調査と保存修復が早急に望まれる点をあわせて述べる。

1、前言

和歌山市の西に広がる臨海部のうち、和歌川の河口を中心とした一帯は和歌浦と呼ばれ、往古より景勝地として知られていた。時代を経ていくらか景観の変化が見られるものの、「万葉集」においても詠まれたその良好な眺望の面影はとどめられており、現在では国指定の名勝に指定されている。江戸時代の初代将軍徳川家康の没後、その側室であった養珠院（お万の方）が和歌浦に浮かぶ小島の妹背山に家康の供養を願って多数の経石を奉納したことを契機とし、養珠院の子である紀州藩主徳川頼宣によってその後、妹背山には海禅院多宝塔や拝所の観海閣などが建立された。また、頼宣は陸地と妹背山とを結ぶ石造の三断橋を架け渡した他、この橋の陸側のたもとには「あしべ屋」¹と「朝日屋」の2軒を茶屋として並べて設けた。これらの江戸時代初期にお

1 諸史料では「阿し遍」や、「芦邊屋」、「蘆辺屋」、また「あしべや」など、さまざまに記されている。本稿では引用文以外において「あしべ屋」という表記に統一する。なお明治10年代とも思われる「あしべ屋」の古写真が新たに見つかった（毎日新聞和歌山版、2012年7月19日）。

*環境学部非常勤講師

ける造営に基づき、妹背山を巡る建築群の基本的な構成はほぼ決定されたといつてよい。

明治時代になると、和歌浦は国内で有数の観光地としてさらなる画期を迎える。2軒の茶屋のうち「朝日屋」は明治時代の中葉頃までに衰退したが、「あしべ屋」は隣の「朝日屋」の地を取り込んで旅館を大きく構え²、皇族や名士が宿泊する名高い施設として喧伝された。夏目漱石が和歌山市で講演をおこなうために「あしべ屋」を訪れようとしたのは、この旅館の最盛期に当たっていたはずである。

明治44（1911）年8月の漱石の日記³には、

「十四日（月） 快晴

九時五十二分の汽車で和歌山に行く事にする。和歌山からすぐ電車で和歌の浦に着。あしべやの別荘には菊池総長があるので、望海楼といふのにとまる。」

と記されており、この紀行の体験は後期三部作のひとつとして数えられる彼の長編小説「行人」の文中に後日、活写された⁴。

しかし「あしべやの別荘（以下、「あしべ屋別荘」と記す）」というからには、「本館」が他に建っていたに違いない。この時に漱石が泊まろうと当初予定していた「あしべ屋別荘」とは、では具体的に和歌浦のどこに位置していたのであろうか。どうして有名な旅館の「本館」ではなく、その「別荘」に泊まろうとしたのであろうか。またその建物の様子は一体どのようなものであったのか。それらの問いを解き明かそうと試みたのが本稿である。

和歌浦に関する明治・大正時代の史料は比較的豊富であると言っても良いが、漱石が言及した「あしべ屋別荘」については詳細がほとんど不明である。「あしべ屋別荘」に類する記述や地図、あるいは写真が多く散見されるものの、相互に矛盾する点も時には認められるのであって、諸資料の整理を試みた途中経過の報告をここではおこないたい。

後述するように、明治時代から大正時代を生きた「あしべ屋」の主人である藪清一郎は小島の妹背山の麓に立つ「あしべ屋別荘」に衆目を集めようと、明治時代の中期以降、盛んに活動した

2 土井吉十郎「明治新撰紀伊繁昌誌」大橋鎌之助発行（明治26〔1893〕年）、22頁。そこでは和歌村の「旅人宿」として「芦邊屋 藪清一郎 米榮 藤村佐次郎」の2軒が挙げられるのみである。和歌山市立博物館編「写真にみるあのころの和歌山：和歌浦編（戦前）」和歌山市立博物館（平成23〔2011〕年）、6頁、写真10解説を参照。

3 夏目金之助「漱石全集第20巻：日記・断片、下」岩波書店（平成8〔1996〕年）、341頁。菊池大麓は当時の京都帝国大学総長。この頃の和歌浦における旅館の宿泊代の違いは東京人事興信所「旅館要録」（明治44〔1911〕年）に掲載された広告から示唆され、「あしべや 宿料、一圓五十錢以上／望海楼 宿料八十錢、一圓／米榮 宿料八十〔錢〕以上」（42頁）と書かれている。漱石は煩わしさを避けるため、止むを得ず格落ちの旅館であった望海楼へと宿泊先を変更したと考えられる。望海楼はしかし、後にあしべ屋を支店とする勢いを呈した。当地の観光化におけるこの頃の変容を詳細に述べたものとして、神田孝治「近代期における和歌山市の観光都市化の過程とその背景」、『第9回観光に関する学術研究論文：観光振興や観光交流に対する提言 入選論文集』、財団法人アジア太平洋観光交流センター（平成15〔2003〕年度）、1～14頁；また島津俊之「経験とファンタジーのなかの和歌浦：田山花袋『月夜の和歌浦』を読む」、空間・社会・地理思想第14号（平成23〔2011〕年）、41～67頁を参照。

4 前掲書、「漱石全集第20巻」、635頁。また溝端佳則「漱石が見た百年前の和歌山：写真・小説・日記・新聞記事より」、和歌山県立文書館『和歌山県立文書館だより』和歌山県立文書館、第31号（平成23〔2011〕年）、2～7頁を参照。

形跡が知られる。だが一方で、「あしべ屋別荘」とかつて呼称されていた建物が妹背山という小島の外に存在していた印象を与える史料もうかがわれ、この点が混乱を招いてきた。

本稿では、妹背山に現存する「あしべ屋別荘」について最初に沿革を記した後、当該遺構を観察した所見を次に述べ、これが増改築を経た痕跡を有していることに触れる。続いて文献史料や地図、当時撮影された写真を勘案した際にその姿がどのように解釈されるのか、総合的な考察を加える。さらに史料探索の結果、漱石が日記に残した「あしべ屋別荘」は3つの場所にあったようにうかがわれるが、その中では妹背山の麓に立つこの建物が最も可能性が高いことを述べ、結論とする。

2、「あしべ屋別荘」の沿革

妹背山の北側の麓に、最初は海禅院と称する寺が建立されていた点は明らかである。遺構の形姿とともにその建物名が明記されている史料としては「紀伊国名所図会」巻之二⁵（文化8〔1811〕年）、また「和歌浦之図」⁶（天保3～10〔1832～39〕年）などを掲げるのが適当であろう。建築の名は記されていないものの、海禅院の当時の様子を良く伝える図としては彩色が施された「妹背山の図」⁷（嘉永4〔1851〕年以前）が注目され、そこでは屋根に植物が繁茂するほど荒れ果てた小さな寺院の様子が観察される。この寺の創始は江戸初期に遡るが、やがて養珠寺の末寺となった。

江戸幕府が崩壊して明治政府へと移行した明治維新の影響は当然、妹背山に立つ建築群の維持管理にも及んだ。明治4（1872）年には宝塔を囲む玉垣（宝塔の境内）より外側の「島の周辺部が徳川家から和歌山藩庁（後の県庁）に引き渡されて」⁸おり、この経緯を示す文書の図中⁹にも海禅院の寺名がうかがわれる。島の周辺部に該当する海禅院の跡地に旅館「あしべ屋」が代わって新しく建てられたのはその後のことであろう。荒廃した寺院を改修して旅館に用いたとは思われない。

明治時代中期の妹背山の「別荘」を伝える貴重な文献は「あしべ屋」から出された明治26（1893）年の「紀伊和歌浦図」（図1）であり、寄棟造の平屋建てが観察され、「芦辺や汐湯」と書かれている（図2、3）¹⁰。海側（北側）に向かって、窓が連続して設けられていたようにも見え、また建物の西方に煙突らしきものがうかがわれるのも目を惹く。別の頁には大きな本店の図も紹介され、当書が目指した「あしべ屋」を広告する目的が果たされている。しかし同年刊行の「明治新撰紀伊繁昌誌」には、「あしべ屋」と「米榮」のわずか2軒しか和歌浦の宿泊所が挙げられていないことも留意しなければならない¹¹。「あしべ屋」の広告を目的に出版された「紀

5 和歌山市立博物館編「和歌浦：その景とうつりかわり」和歌山市立博物館（平成17〔2005〕年）、40頁、図25（最上図）。また額田雅裕解説、芝田浩子彩色「和歌浦の風景：カラーでよむ『紀伊国名所図会』」ニュース和歌山（平成24〔2012〕年、17頁、画：西村中和「妹背山 多宝塔 観海樓 三断橋 芦辺茶屋」では彩色された見やすい拡大図が掲載されている。

6 前掲書「和歌浦：その景とうつりかわり」、44頁、図31。

7 上掲書、46頁、図37。

8 藤本清二郎「江戸・明治前期、和歌の浦の社会史史料：景観保全・水産業両立化への歩み」、紀州経済史文化史研究所紀要第10号（平成2〔1990〕年）、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、222頁。

9 上掲書、171頁。



図1：「紀伊和歌浦図」中の『和歌浦全圖』、右頁の右下に描かれた「別荘」
(和歌山県立図書館蔵2冊のうちの1冊、311664825：WA11//47)



図2：「紀伊和歌浦図」拡大図
(和歌山県立図書館蔵)



図3：「紀伊和歌浦図」拡大図
(国立国会図書館関西館蔵)

伊和歌浦図」に、敵対する同業者であるはずの「米榮」の図も描かれているのは興味深い、
「紀伊和歌浦図」が「あしべ屋」の様相を過大に描く傾向は念頭に置かれるべきである。どのよ
うな集客の方策を講じるべきか、さらなる模索がなされていた時代であったと考えられる。

そうした中で明治36（1903）年、皇太子が和歌浦を訪れ、妹背山にも立ち寄った。「皇太子殿
下には和歌山に行啓あらせられ、妹背山下の別荘に駕を駐めさせられた、光榮限りなく、明光浦
はますます異彩を加へられた次第で、縣民の歡喜譽ふるに物はない、そこで芦邊屋主人藪清一郎
老人は、畏き御蹟を紀念し奉るため、此の碑を建た」（「鶴駕飛降碑」の説明¹²）。この碑（明治
38〔1905〕年に建立）は今でも妹背山の北に建っており、「あしべ屋別荘」の来歴を傍証する数
少ない史料のひとつとなっている。

和歌浦地域の発展を願う「あしべ屋」主人の藪清一郎の思いは叶って、旅館の数は次第に増え、
明治時代末期の刊行物「紀伊名所案内」には和歌浦の旅館として「芦邊屋、望海樓、片男浪館、
米榮別荘、島田別荘」の5軒が掲げられている¹³。和歌山県庁前から和歌浦までの間に市街電車が
が開通したのが明治42（1909）年であり¹⁴、後には延長されて交通の利便性は飛躍的に高まった。
「紀伊名所案内」の中では妹背山の多宝塔の紹介の後で「ここにも芦邊屋の別荘もあり、球戯室
もある、鶴も飼つて居る」¹⁵と述べられており、この時代の「あしべ屋別荘」にビリヤード場が
付設されていた点が明らかである。

大正8（1919）年の出版物には藪清一郎が2頁にわたる「あしべ屋」の広告を出して、「妹脊
山麓弊館妹脊別荘は幽遠閑雅にして畏くも明治三十六年十月九日 今上天皇陛下の御幸臨あらせ
られしを始め奉り各皇族宮殿下御成の光榮を擔へるは皆此別荘に御座候」¹⁶と記しており、他の
旅館とは異なる妹背山の「別荘」の由緒を強調している。

10 塩崎毛兵衛「紀伊和歌浦図」塩崎毛兵衛（明治26〔1893〕年。改訂版：明治29〔1896〕年）。また宇田川
文海「南海鐵道旅客案内」下巻、南海鐵道（明治32〔1899〕年）、85～86頁も見よ。前掲書「和歌浦：そ
の景のうつりかわり」、51頁（図）、また89頁（資料解説）も参照。「紀伊和歌浦図」の末尾には「あしべ
屋」の広告が付されており、「蘆辺屋別邸正潮湯」と題された文面には「弊家別邸潮湯浴場妹背山の西
南麓にして遥に名草山紀三井寺の景を眺望し自から精気を快然たらしめ加て空氣の清□（註：清か）な
るハ固より言を待たず」と語っている。ただし「別荘」の方角は妹背山の西南ではなく、北ないし北東
であり、まったくの逆としか思われない。その後、「浴室も亦清潔」であり、入浴によってさまざまな効
験があることが具体的な多数の病名とともに述べられている。「紀伊和歌浦図」は和歌山県立図書館に2
冊、また国立国会図書館関西館に1冊所蔵されているが、和歌山県立図書館蔵のものに見られる「和歌
浦全圖」の頁に押された「芦辺海水場」の朱印は国会図書館関西館蔵のものには見られず、そこでは
「海水浴場」とだけ黒色で刷られている。塩崎毛兵衛の名が記された奥付の頁の構成も異なり、藪清一郎
が出版物で試みた多様な広告方法の解明が待たれる。なお県立図書館蔵のものには「明治廿九年四月十
四日更正御届」の奥書がある。療養を目的とした和歌浦における当時の海水浴場については高嶋雅明
「和歌浦開発と和歌浦土地株式会社：若干の資料紹介と覚え書」、紀州経済史文化史研究所紀要第10号
（平成2〔1990〕年）、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、26頁を参照。

11 註2参照。

12 大川民純（墨城）「紀伊名所案内」紀伊名所案内発行所（明治42〔1909〕年）、44頁。この碑については
今井金陵「和歌浦名勝案内」新和歌山社（大正11〔1922〕年）、19頁にも言及がある。

13 上掲書、「紀伊名所案内」、54頁。

14 和歌山市立博物館編「写真にみるあのころの和歌山：市街電車編（戦前）」和歌山市立博物館（平成24
〔2012〕年）、1頁。

15 前掲書、「紀伊名所案内」、41～42頁。

16 濱口彌「新和歌浦と和歌浦」枇榔助彌生堂（大正8〔1919〕年）、24～25頁の間の広告。

だが和歌浦の観光業は、全体として斜陽を迎えつつあった。大正11(1922)年に皇太子(昭和天皇)が訪れたという妹背山の「あしべ屋別荘」のビリヤード場は翌年の大正12(1923)年に人手へ渡り、島外の近くに移築された¹⁷。「あしべ屋」は大正14(1925)年に廃業し、望海楼に買収される¹⁸が、その望海楼もやがては姿を消す運命となる。

昭和16(1941)年、妹背山の「別荘」は西本健次郎によって買収されて、別荘として用いられた¹⁹。その後、第二次世界大戦を終える頃には疎開先としてこの建物が選ばれ、西本家の住居として使用された。

国内の平穏が取り戻されていくらか経た時期に、西本家は和歌浦の別地に住居を構えた。旧「あしべ屋別荘」は大本山活禅寺和歌山別院の大龍王山海龍寺に貸され、座禅道場としてしばらくの間、用いられた。今日、この建物がしばしば海龍寺あるいは活禅寺と誤って呼称されるのはこうした事情によると思われる。近年、活禅寺との貸借関係は解消され、現在に至っている²⁰。

では建物の現状はどのようなものであるのか、現在の所有者から許可を得て実見した結果を次節において簡単に記したい。

3、「あしべ屋別荘」の現状

現状の諸図面を図4²¹、6～7に示し、また写真を図5a、8～16に掲げる。建物の全体は4つに区分される。ここでは西から東に向かって順次、(1)倉庫、(2)玄関部、(3)座敷、(4)奥座敷と仮に呼ぶ。

西側に位置する(1)倉庫は最も新しく付加された部分であり、本稿では詳細を示さない。(2)玄関部から(3)座敷、また(4)奥座敷と東へ進むに従って床高は徐々に上がり、それは外観の屋根の高さにもあらわれている(図5)。破風を外観の正面の上に見せる(2)玄関部は西側の倉庫ほど新しくはないものの、屋根は(3)座敷の屋根下地の上を履って設けられていた。室内においても改変の痕跡が多く見られた。

注目されるのは(3)座敷であって、やはり大幅な改変が施されているが、ここには床の間を備えたふたつの間(図9)がかつて並んでいたことが現所有者からの聞き取りによって判明した。内法長押には釘隠し(図10、11)が打たれており、これは(3)座敷にしか見られない特徴である。またふたつの間を隔てる4本引の襖の引手には徳川家の葵紋(図12)がうかがわれる。しかし異なった文様が施された別の引手(図13)も用いられており、ともに転用が疑われる。当該建

17 中西重裕「わかやまワクワク探検隊：明治・大正・昭和たてもの物語」和歌山新報社(平成14[2002]年)、96頁。

18 前掲書、「写真にみるあのころの和歌山：和歌浦編(戦前)」、6頁。

19 三井建設(株)史編纂室「三井建設社史」三井建設(平成5[1993]年)、28頁。現在の所有者である西本和子氏によれば、西本健次郎が南海電気鉄道で「あしべ屋」の当時の主人と偶然乗り合わせ、買収を依頼されたと伝えられている。

20 西本和子氏からの聞き取りによる。大本山活禅寺「和歌山別院存亡の危機」活禅の友第187号(平成23[2011]年11月)、大本山活禅寺、32～33頁も参照。

21 図5bに古写真を示す。前掲書、「新和歌浦と和歌浦」、25頁の前に掲載されている写真は、この絵はがきに電信柱を消すなどの修正を施したものと見られる。建物右端のビリヤード場が鮮明に確認される。武田博編「近畿名勝大観」有心館(明治42[1909]年)、「和歌の浦」の頁の写真も重要であり、(4)奥座敷が増築される前の姿を伝えている。



図4：妹背山の「あしべ屋別荘」、配置図



図5a：妹背山の「あしべ屋別荘」全景、北より見る
(2012年、西本直子撮影)



図5b：絵はがき
「和歌の浦あしべや妹背別荘」
(和歌山大学紀州経済史文化史
研究所蔵、26-584、大正写真
工芸所製造)

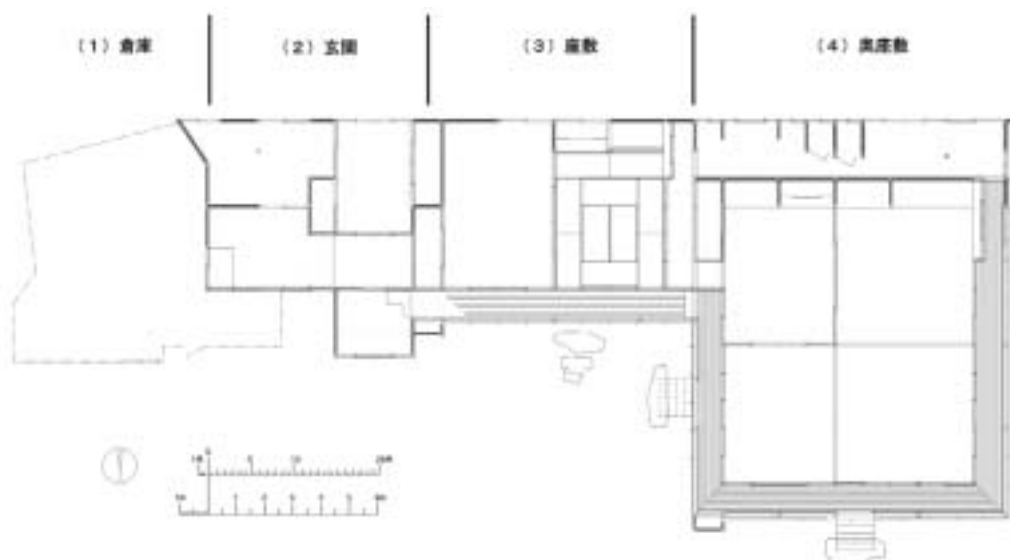


図6：「あしべ屋別荘」、略平面図（作図：西本直子）



図7：「あしべ屋別荘」、建具図（作図：西本直子）



図8：観海閣側より（3）奥座敷を見る



図9：（2）座敷、東側



図10：（2）座敷の廊下



図11：釘隠し



図12：葵紋の引手



図13：別の引手



図14：(3) 奥座敷、西側



図15：(3) 奥座敷、東側



図16：(3) 奥座敷の西側廊下

物において最も時代が古い印象を与えるのがこの（3）座敷であり、天井の一部を外して覗いたところ、和小屋が組まれていることを確認した。墨書もわずかながら残されているようである。

（4）奥座敷にも細部において多くの改変がなされている。当初は室内全体が田の字に仕切られていたことが聞き取りにより判っている。床の間を備えた座敷（図14、15）に前の間を配置したものをふたつ並べた形式であったと推定される。現存する襖にはやはり古い引手が用いられているが、やはり再利用であろう。南側と東側、また西側三方の廊下のガラス戸内側に擬宝珠付欄干が回されている点が興味深い（図16）。縁側でも鉄の補強材が利用されている。小屋組では鉄棒を併用したトラス組が観察された。（3）座敷に（4）奥座敷が増築されたと思われる。

4、関連資料

和歌浦に漱石が訪れた明治時代末期において、「あしべ屋別荘」と呼ばれたものは3つ知られているように思われる。その第一は「あしべ屋」本店に隣接していた建物である。明治42（1909）年の「紀伊名所案内」では「同じときにあつた朝日屋といふ茶屋は芦邊別荘のあるところがそれである」と書かれており²²、これを裏づける「あしべや北の別荘」の古写真が残っている（図17、年代不明。ただし製造は大正写真工芸所）。明治時代から大正時代にかけて和歌浦の風景写真が撮影され、また旅館が絵はがきとしてそれらを販売することもおこなわれた。図17もそのうちの一枚と思われ、当の「あしべ屋」から販売されていたようである。後方の小山が見え、建物の前面には広い道が通っている。二棟の建物のかたちと、車の後方に見られる入口の唐破風などから判断するならば、「あしべ屋」の本店の北側に建てられた新棟であるとみなされる。妹背山上から撮影された「あしべ屋」の全景写真（図18）の右側に見られる建物と比べて見るならば明瞭であろう²³。

しかし同じ年に発行された「紀伊和歌浦明細新地図」²⁴（図19）を眺める時、絵はがきの「あしべや北の別荘」があるはずの場所は「阿し遍`や本店」に含まれており、他方で妹背山の北側に「阿し遍`や別荘」、また内海を隔てた対岸にも同じく「阿し遍`や別荘」と書かれていることに気づく。本店の隣のものを第一の「別荘」、妹背山に記入されたものを第二の「別荘」とするならば、対岸に描かれたものは第三の「別荘」とみなされる。この第三の「別荘」に関して写真を提示しつつ、藤本清二郎が「観海閣の北からみた芦辺屋別荘」と記している<sup>25</sup>のは、「紀伊和歌浦明細新地図」に示された「阿し遍`や別荘」の記述を尊重したからに違いない。10年後の大正8（1919）年、同地域の地図が旅行案内「新和歌浦と和歌浦」²⁶に掲載されている（図20）。だが第三の「別荘」は描かれてはいない。

手書きの跡もあからさまなこの旅行案内の地図に遺漏があったとも考えることができよう。しかし第三の「別荘」については「紀伊和歌浦明細新地図」の他に記録がまったくないように思わ

22 前掲書、「紀伊名所案内」、41頁。

23 濱口彌「新和歌浦と和歌浦」枇榔助彌生堂（大正8〔1919〕年）、24頁の次に掲載されている似た写真では建物の様子が異なっており、撮影された時代が違うことが知られる。

24 岡田久楠「紀伊和歌浦明細新地図」岡田久楠（明治42〔1909〕年）。

25 藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版（平成5〔1993〕年）、84～85頁。

26 前掲書、「新和歌浦と和歌浦」口絵。



図17：絵はがき「あしべや北の別荘（あしべや特撰）」
(和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵、26-585、大正写真工芸所製造)



図18：絵はがき「和歌浦 望海樓支店 阿し遍 や全景」（清端佳則氏個人蔵）

和歌浦「あしべ屋別荘」と夏目漱石（西本・西本）



図19：「紀伊和歌浦明細地図」、部分拡大図（和歌山市立博物館蔵）

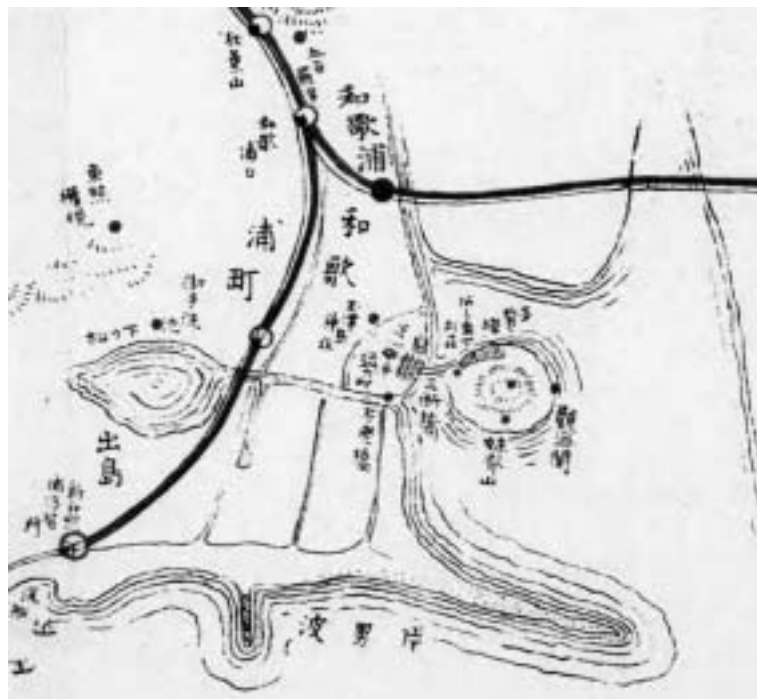


図20：「新和歌浦と和歌浦」、口絵地図（国立国会図書館デジタル化資料より）

れる点が奇異であり、存在していたとしても大きく広告されることはなく、また短期間のうちに役割を終えた可能性が指摘される。現在の住所で言えば和歌浦東に位置していたこの第三の「別荘」は「江戸期の湊御殿の一部（松窓庵）」²⁷が移築されたものであり、近年、養翠園へとさらに移築された。果たして旅館として機能していた時代があったのかどうか、今後刊行される報告書によって詳細が語られることが期待される。

漱石が泊まろうとした「別荘」が、「あしべ屋本店」の隣に設けられた第一の「別荘」であったのか、それとも第二の妹背山の「別荘」であったのかの判断はつきにくい。だが「海禪院跡ハ今ノ芦邊屋別館ニシテ屢皇族ノ御泊所又ハ御休憩所トナレリ」²⁸といった紹介文で看取されるように、本店の隣の「別荘」よりも妹背山の「別荘」の方が知られていたものであり、和歌浦において最も品格を備えた宿として認識されていたことは疑いない。この点からは第二の「別荘」の方が、漱石が宿泊を願った旅館として挙げられるように思われる。妹背山の「別荘」の室内から直接、和歌浦の眺望を楽しむことはできなかった。それにも関わらず皇族や名士たちから大いに注目されていたとすれば、和洋混交の三階作りの高樓からなる本店とは若干離れた、静謐な小島に佇む平屋の宿の雰囲気がより好まれたのであろう。

明治時代の末期にこの「別荘」がいかなる構成をとっていたかについては、関連資料の探索が未だ十全に尽くされておらず、明治・大正期に属する数枚の写真が参考資料として挙げられるのみである。重要な点は東端に寄棟造の建物が立つ写真が残っており、そのさらに東側へ入母屋造の高い建物が新たに付加されたように疑われることであって、図21あるいは図22（明治40 [1907]



図21：絵はがき「和歌の浦妹背公園」（溝端佳則氏個人蔵）

27 前掲書、「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」、84頁。

28 川口松枝「紀州大観 和歌山和歌浦明細案内図」宮井平安堂（大正12 [1923] 年）、9 頁。

和歌浦「あしべ屋別荘」と夏目漱石（西本・西本）



図22：「妹背山と観海閣」、部分
（「写真にみるあゝのころの和歌山：和歌浦編（戦前）」、6-7頁、写真11。
明治40〔1907〕年の消印付きの絵はがき、和歌山市立博物館蔵）



図23：絵はがき「観海閣より阿し遍ゝや妹背別荘を望む」（溝端佳則氏個人蔵）

年の消印が残る)²⁹では寄棟造の建物がうかがわれる一方、図23³⁰に示す古写真では現状とほぼ同じ入母屋造の姿(図8)が写されている。この順序は、妹背山に現存する建物の(3)座敷に(4)奥座敷が増築されたという予想と一致する。

明治26(1893)年の「紀伊和歌浦図」であらわされていた寄棟造の建物の改変された姿が図21、22の写真に写し出されていると推測され、これを証明するためのより詳しい建築調査が必要である。今回の調査で最も古いと思われた(3)座敷の屋根の形は隣の建物へ棟を延長するなど、後に変えられたに違いない。当時、設けられていたと考えられる「汐湯」と呼ばれる浴室の痕跡も失われているようである。残念ながら、妹背山の「別荘」は和歌山県近代和風建築総合調査報告書³¹に取り上げられることがなかったが、こうした点についてさらに理解を深めるための調査研究が望まれる。

5、結語

明治時代中期から大正時代にかけて急激な発展を遂げた和歌浦における観光の歴史を考える上で見逃すことのできない最上の格式を備えた遺構のひとつが妹背山の「別荘」であり、背景を考慮するならば3つ挙げられるもののうち、漱石が宿泊を予定していたのは妹背山に立つ「別荘」であったとも推察される。大人数が泊まった三階建ての本店やその脇の北の別館とは対照的に、平屋の比較的小規模な建物で、静かな環境の中に立ち、皇族や名士たちが愛した名旅館であった。漱石が泊まろうとした時期に「妹背山別荘」東端の大きな入母屋造の(3)奥座敷がすでに増築されていたかなど、さらなる調査が望まれる。応急処置の修理を施した箇所が散見されるため、現状を勘案するならば本格的な保存計画も講じる必要があると考えられる。

謝辞

国立国会図書館、和歌山県立図書館、和歌山市立博物館、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、また和歌山県立文書館主任の溝端佳則氏から各図版の掲載許可をいただいたことに謝意を申し上げます。元和歌山市教育委員会教育長の大江嘉之氏、和歌山市教育委員会の額田雅裕氏、和歌山市立博物館の太田宏一氏、和歌山漱石の会の梶川哲司氏、(財)和歌山県文化財センター事務局長の渋谷高秀氏、同センター文化財建造物課の多井忠嗣氏からは数々の貴重な御教示と御配慮をいただいた。心より感謝申し上げます。

参考文献

- 宇田川文海「南海鐵道旅客案内」上下巻、南海鐵道(明治32[1899]年)。
大川民純(墨城)「紀伊名所案内」紀伊名所案内発行所(明治42[1909]年)。
神田孝治「近代期における和歌山市の観光都市化の過程とその背景」、『第9回観光に関する学術研究論文：観光振興や観光交流に対する提言 入選論文集』、財団法人アジア太平洋観光交流センター(平成15[2003]年)、1~14頁。

29 前掲書、「写真にみるあこのころの和歌山：和歌浦編(戦前)」、6~7頁。前掲書、「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」、84頁、写真62も参照。

30 前掲書、「写真にみるあこのころの和歌山：和歌浦編(戦前)」、6~7頁、写真11。

31 和歌山県教育委員会「和歌山県の近代和風建築」(平成22[2010]年)。

- 岡田久楠「紀伊和歌浦明細新地図」岡田久楠（明治42〔1909〕年）。
- 川口松枝「紀州大観 和歌山和歌浦明細案内図」宮井平安堂（大正12〔1923〕年）。
- 塩崎毛兵衛「紀伊和歌浦図」塩崎毛兵衛（明治26〔1893〕年。改訂版：明治29〔1896〕年）。
- 島津俊之「経験とファンタジーのなかの和歌浦：田山花袋『月夜の和歌浦』を読む」、空間・社会・地理思想14号（平成23〔2011〕年）、41～67頁。
- 高嶋雅明「和歌浦開発と和歌浦土地株式会社：若干の資料紹介と覚え書」、紀州経済史文化史研究所紀要第10号（平成2〔1990〕年）、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、25～40頁。
- 武田博編「近畿名勝大観」有心館（明治42〔1909〕年）。
- 東京人事興信所「旅館要録」（明治44〔1911〕年）。
- 土井吉十郎「明治新撰紀伊繁昌誌」大橋鎌之助発行（明治26〔1893〕年）。
- 中西重裕「わかやまワクワク探検隊：明治・大正・昭和たてもの物語」和歌山新報社（平成14〔2002〕年）。
- 夏目金之助「漱石全集第20巻：日記・断片、下」岩波書店（平成8〔1996〕年）。
- 額田雅裕解説、芝田浩子彩色「和歌浦の風景：カラーでよむ『紀伊国名所図会』」ニュース和歌山（平成24〔2012〕年）。
- 濱口彌「新和歌浦と和歌浦」枇榔助彌生堂（大正8〔1919〕年）。
- 藤本清二郎「江戸・明治前期、和歌の浦の社会史史料：景観保全・水産業両立化への歩み」、紀州経済史文化史研究所紀要第10号（平成2〔1990〕年）、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、135～229頁。
- 藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版（平成5〔1993〕年）。
- 溝端佳則「漱石が見た百年前の和歌山：写真・小説・日記・新聞記事より」、和歌山県立文書館『和歌山県立文書館だより』和歌山県立文書館、第31号（平成23〔2011〕年）、2～7頁。
- 三井建設(株)社史編纂室「三井建設社史」三井建設（平成5〔1993〕年）。
- 和歌山県教育委員会「和歌山県の近代和風建築」（平成22〔2010〕年）。
- 和歌山市立博物館編「写真にみるあこのころの和歌山：和歌浦編（戦前）」和歌山市立博物館（平成23〔2011〕年）。
- 和歌山市立博物館編「和歌浦：その景とうつりかわり」和歌山市立博物館（平成17〔2005〕年）。
- 和歌山市立博物館編「写真にみるあこのころの和歌山：市街電車編（戦前）」和歌山市立博物館（平成24〔2012〕年）。